

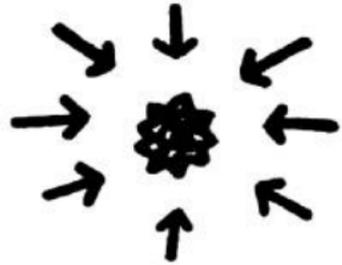
前回、ニューズウィーク誌が発表した病院ランキングで東大病院が国内トップ、世界でも16位にランクされたことを紹介しました。

また、30年間も東大病院で働いてきた私や25年ぶりに当院に受診した養老孟司先生からみても、東大病院が「よい病院」に生まれ変わっていることにも触れました。今回は東大病院の放射線治療について書いてみたいと思います。

放射線治療の大原則はがん病巣に放射線を集中させて、周囲の正常な臓器の被曝（ひばく）を抑えることです。完全に実現できれば、がんに限量の放射線を照射しても副作用はゼロになりますから、100%の確率でがんを根絶

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

進化した東大病院の放射線治療

できることになります。

この理想を実現するには、治療の直前、あるいは治療中に、病巣と周辺の臓器の画像を撮影して、毎回の放射線照射の精度を高めることです。

東大病院の放射線治療部門は、この「画像誘導放射線治療」のトップランナーとなってきました。

80年代に、世界初となる「同室型コンピュータ断層撮影

装置（CT）」を開発しまし

た。放射線治療装置と位置決め用のCTを向かい合わせに配置したもので、CTの撮影後に寝台が180度回転して、自動的に位置決めが完了できます。

さらに、放射線治療用のビームそのものでCTを撮影する「超高圧X線CT（MVCT）」を世界ではじめて臨床

こうした画像誘導放射線治療の歴史を受け継いで、東大病院放射線治療部門では、極めて精度の高い放射線治療を提供しています。

とくに、前立腺がんの「定位放射線治療」では、早期から進行したものまで、たった5回の通院で治療が完了します。すでに600人以上がこの治療を受けており、良好な治療効果を確認しています。

保険医療で、高額療養費制度も利用できますから、自己負担額も限られます。

多くの病院は40程度度の照射回数を採用しているので5回照射は例外的。愛知県や長野県など地方から「通院」する患者も少なくありません。

（東京大学特任教授）